論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　何　月琦

論　文　題　目

中国語母語話者による第二言語としての受身構文の習得
—学習者コーパスをデータとして—

論文審査担当者

主査　　名古屋大学准教授　志波　彩子

委員　　名古屋大学教授　杉村　泰

委員　　名古屋大学教授　林　誠

委員　　名古屋大学准教授　鷲見　幸美

論文審査の結果の要旨

本研究は,「I-JAS」,「YNU」,「CTLJ」という3つの学習者コーパスに収録されている23タスクの作文1,640篇を用いて，中級から上級レベルの中国語を母語とする日本語学習者による受身構文の使用実態を調査し，学習者の能力別の使用傾向を明らかにしたものである。その上で，日本語母語話者との比較を通して，上級レベルの学習者にとっての受身構文の使用上の困難点を明らかにしている。さらに，日本と海外の教育現場で幅広く使われている6シリーズの総合日本語教材17冊を用いて，初級と中級教材における受身構文の扱いについて調査し,誤用･非用調査の結果を踏まえて，各レベルにおける受身構文タイプの提示順を提案したものである。

本研究の第一課題として，中国語母語話者による受身構文の使用実態を掲げ，中級から上級レベルの中国語を母語とする日本語学習者を対象とし，3つの学習者コーパスにおける15タスクの作文906篇を用いて，受身構文の使用と学習者の日本語能力との関連性を調査した。その結果，受身構文の使用傾向は習熟度とともに変化すると考えられるが，習熟度が高くなっても依然として，学習者にとって難しい受身構文タイプがあることを明らかにしている。例えば,「直接受影型」,「事態実現型」,「習慣的社会活動型」,「状態型」という4つの受身構文タイプの使用は習熟度とともに正確性を増す傾向が見られたが，一方で「使役受身型」と「所有物受影型」では，受身の使用と学習者の日本語能力の関連は見られなかった。

第二課題として，中国語母語話者による受身構文の誤用・非用実態を調査した。先の課題1の作文906篇より抽出した誤用例と非用例をパターン化し，誤用と非用の要因を，①受身構文の意味・機能に関する誤用，②受身構文の構造形式に関する誤用，③自他動詞に関する誤用，④受身構文のテンス・アスペクトに関する誤用，⑤使役受身型受身構文に関する非用，⑥授受構文との使い分けに関する誤用，⑦可能構文との使い分けに関する誤用，⑧受身構文の述語動詞の形成に関する誤用，⑨受身構文の述語動詞の選択ミスに関する誤用，という9つに分類し，詳しく考察している。例えば，①の「受身構文の意味・機能に関する誤用」では，有情主語受身と非情主語受身の機能を分けた上で，非情主語受身の「動作主背景化機能」については，さらに3つの場合（中国語の存現文に対応する場合，習慣的社会活動の場合，中国語の意味上の受身に対応する場合）に分けてそれぞれの要因を考察している。

第三課題として，中国語母語話者と日本語母語話者の作文を比較することで，上級学習者と日本語母語話者の受身構文の使用の違いを明らかにしている。日本語母語話者は「所有物受影型」と「事態実現型」の使用が有意に多く,「習慣的社会活動型」の使用が有意に少ないのに対し，上級学習者は逆に「所有物受影型」と「事態実現型」

論文審査の結果の要旨

の使用が有意に少なく,「習慣的社会活動型」の使用が有意に多いことが示された。さらに,「直接受影型」では日本語母語話者が直接受影型を使用しているところに，上級学習者は「授受構文」「使役構文」を使用するなど，有情主語受身構文の「視点の一貫性機能」とも重なって，受身，授受，使役の使い分けが学習者にとって習得が難しいことを示唆している。このほか，いわゆる「間接受身（はた迷惑の受身)」と呼ばれる受身構文では，日本語母語話者が自動詞文を使用しているところに，上級学習者は間接受身を使用していることが明らかになった。逆に，非情物主語受身では，日本語母語話者が非情主語受身を使用しているところに，上級学習者は自動詞文を使用していることなどが明らかになった。

最後に，以上の誤用・非用の実態を踏まえ，総合日本語教科書 17 冊における受身構文の扱いを調査した上で，より学習効果が見込まれる受身構文の導入順序に関する提言を行っている。

【口述試験の講評】

本研究は，中国語母語話者の作文約 1640 篇を手作業で調査，分類し，中間言語における受身構文の使用実態を統一的な統計処理で示し，独自の受身構文のタイプ分けを用いてどのような受身構文タイプに誤用・非用が多いのかを，非常に大きなスケールで明らかにしている。学習者の誤用・非用の要因についても，単に「意味・機能を習得できていない」という大枠の考察にとどまらず，意味・機能の誤用にどのような種類の誤用があり，どのような受身構文タイプと関わっているのかを，これまでの日中対照研究の知見を取り入れて，中国語の受身構文の意味・機能や構造的特徴をも勘案しながら考察している点など，丁寧な記述が評価できる。さらに，中国語母語話者と日本語母語話者の同一テーマの作文における受身構文の使用を比較したことは，誤用と非用の使用実態を別の観点から裏付けており，本論文が博士学位に相応しい内容と判断した。